



ボストンはアメリカ北東部のニューイングランド地方の中心都市で、石畳の細い路地にレンガ造りの家並みが続く、まるでヨーロッパを彷彿とさせる美しい都市です。最も古い歴史を持つ街の一つで、アメリカ独立戦争に関する多くの史跡があり、フリーダムトレイルというルートに沿って観光出来るようになっています。観光客のみならず、こちらの歴史好きの人にとっても、魅力的な街のようです。

ボストンの人口は60万人で、周辺人口と合わせ450万人の大都市圏を形成しております。学園都市でもあり、アメリカの最古の大学「ハーバード大学」や世界中にハイテク頭脳を送りつづける「マサチューセッツ工科大学 MIT」などがあります。ジョン F ケネディー、オバマ大統領や数々の有名人を輩出しています。また、文化芸術レベルも高く、パークリー音楽大学、ボストンバレエなども有名です。独立記念日には、ボストンを流れるチャールズ川岸で花火とともに行われるボストンポップスオーケストラのコンサートを聞くことが出来ます。諏訪湖の花火とは一味違った趣で、次々と打ち上げられていました。夏の時期には、ボストンから西へ車で3時間程の所にあるタングルウッドで、その演奏を聴くことが出来ます。ここには、芝生席があり、我が家のような子連れ家族も気軽に交響楽を楽しむことが出来ます。芝生に自由にシートを敷き、小さなテーブルに花を飾り、お弁当を食べ、ワインを飲みながら演奏を楽しみます。我が家もとっても贅沢な読

書(お昼寝?)の時間を過ごすことが出来ました。

またスポーツ面では、MLBのレッドソックス、NBAのセルティックス、NFLのペイトリオッツ、NHLのブルーインズがボストンを拠点としています。なかでもボストニアンが大好きなのは野球チームのレッドソックスです。本拠地のフェンウェイパークは全米最古、かつ、最小のスタジアムで、観客席と選手の距離がとても近く、試合中の応援はとても一体感があります。

このスタジアムの近くに、Medical Areaと呼ばれる地区があり、Brigham and Women's HospitalやBeth Israel Deaconess Medical Center, Joslin Diabetes Centerなど多くの病院や研究機関が集まっています。私はその一角にあるChildren's Hospital BostonのTransplantation Research Centerに所属しています。ボスのDavid Briscoe 助教授は血管新生に関心があり、我々のラボではこれらの基礎研究の他、臨床検体を使った様々な研究が行われています。スタッフは現在2名のテクニシャンの他、アイルランド、インド、ドイツ、フランスからの研究員で構成され国際色が豊かです。この研究室の中で、私に与えられた仕事は、マウスの心移植モデルを用いて解析をすることです。このモデルを使って、信州大学でも研究をしていましたが、最初は顕微鏡にも慣れず、モデル作りに苦労しました。天野教授から“これが出来れば、海外に留学出来る”と励まされ頑張ったのを思い出します。現在は、VEGFとそれに関連した結合蛋白の、拒絶反応との関わりについて研究しています。時には反対の結果が出たり、思い通りに行かないことも多いのですが、ボスからは、そういう所からこそ、新しい発見が見つかると言われます。ともすると、結果ばかりを追求してしまいがちですが、このような姿勢が重要であると改めて認識しています。

最後になりましたが、このような留学の機会を与えて頂いた外科2天野教授、ならびに医局員の皆様に感謝申し上げます。

(2010年4月)

(信州大学医学部外科学講座(2)所属)